様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３４３１７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３３７８

研究課題名（和文）ローマ・クアドリエンナーレにみる定期美術展の形成と変容(1931-1956)

研究課題名（英文）Formation and Transformation of Periodical Art Exhibition: Quadriennale di Roma (1931-1956)

研究代表者
鯖江　秀樹（SABAE, Hideki）

京都精華大学・芸術学部・准教授

研究者番号：３０７９３６２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1931年から1956年まで、計7回のローマ・クアドリエンナーレを考察対象とした。この美術展の実像と、芸術家や批評家、あるいはイタリア社会とのかかわりを一次資料から分析することを試みた。それによって以下のことを明らかにした。第一に、参加作品やその規模、運営機関の変化、戦中戦後における展覧会の変遷などクアドリエンナーレの概要である。第二に、規定や制度の変更が展覧会のあり方に決定的な役割を果たしていたことである。また、美術の国際化の流れにクアドリエンナーレが連動していることなどが判明した。これからの芸術、あるいはその展示手法の展開を考察するうえで、過去の具体的な参照点を提示できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「規定の変更」とは、ジャンルやサイズの選定から自由度を失わせる改変であった。それは、ファシズムの時代から戦後の民主社会への移行期にあって、表現の自由が狭められていくという逆説であった。ただ、この国の美術が国際的なマーケットの要請にそって、作品のなかに「イタリアらしさ」を自己演出しようとしていたことを見逃すべきではない。
　こうした事実や特徴を突き止めたことにより、日本各地で開催される芸術祭への教訓を得た。第一に、定期美術展は国や地域単位の問題ではなく、国際動向や芸術への認識など、広い射程をもって議論されるべきである点、第二に、「展示のレトリック」はより深く検討される問題である、ということである。

研究成果の概要（英文）：The subject of this research was Roman Quadriennales from 1931 to 1956. It attempted to analyze this art exhibition and its involvement with artists, critics, or Italian society. As a result, I have clarified two main points. The first was an overview of the Roman Quadriennales, including the participating works and their scale, changes in the secretariat and management organization, and rearrangements of the exhibition rules during and after the war. For example, since 1935, regulations and management systems have played a vital role in changing the way exhibitions worked. Second, I have made it clear that the Quadriennales were linked to the trend of internationalization of art, such as its involvement with the Italian Contemporary Art Exhibition at the Museum of Modern Art in New York. These two points are historical and concrete reference points for considering the development of today's art or its exhibition method.

研究分野：近代史、表象文化論

キーワード：定期美術展　美術批評　戦後美術　イタリア　モダンアート　地域アート　文化政策　動態文化論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現在、国内外でビエンナーレやトリエンナーレ、アートフェアや芸術祭と銘打たれた、定期的に開かれる美術展がさかんに催されている（以下では「定期美術展」と総称する）。開催地は都市圏から地方へと分散し、表向きの理念やテーマの背後には、芸術を呼び物にして地域の経済振興や観光活性化を図るという、したたかなねらいも見え隠れしている。行政側も注力するこうした美術イベントは、国内に限ってみてもやや乱立気味の感があり、まもなく淘汰が始まると囁かれている。すくなくとも、今後「定期美術展」の存在意義が厳しく問われていくことは避けようもないだろう。こうした世界的現象に鑑みると、定期美術展が、そもそもどのような要求に沿って誕生し、いかなる歴史的経緯を経て現在に至るのかを批判的に再考することが急務であると言える。

２．研究の目的

前述の今日的状況に鑑みて、本研究は、定期美術展の発祥の地であるイタリアの実例を複数の観点から考察し、世界各地の芸術祭や国際美術展の存在意義について、歴史的な視座のもとに提言を与えることを目的とする。

主たる考察対象は、1931 年に始まったローマ・クアドリエンナーレである。これは、（80 年代以降何度も開催が危ぶまれたが）現在も継続されている定期美術展であるが、ヴェネツィア・ビエンナーレやミラノ・トリエンナーレとは異なり、国内アーティストのための展示の場である。その歴史のなかで私がとくに注目したのは、ファシズム時代から第二次大戦直後にあたる 1956 年までの計 7 回のクアドリエンナーレである。戦後の民主化の時代には、クアドリエンナーレは積極的な海外展開を目指しており、日本国際美術展（東京ビエンナーレ）にも協賛していた。

この時期のクアドリエンナーレに着目したのは、以下の理由による。

（１）形成の特殊性：クアドリエンナーレがファシズム体制下の国民の同意形成をねらいとした新設の国家的美術イベントであったこと。
（２）変容の特殊性：（１）にもかかわらず、ファシズム政権崩壊後も間断なく継続される一方で、特に若い世代のアーティストから開催意義をめぐって対立や不和が生じていたこと。
（３）イタリア国内の数ある定期美術展のなかでとくに体系的な研究が進んでいないこと。
（４）関連文献を所蔵するクアドリエンナーレ財団の資料整理が格段に改善され、一部はデジタル化されていること。

付言するのなら、本研究はまた、2011 年の自著『イタリア・ファシズムの芸術政治』（水声社）で見出された課題にも深く関わっている。全体主義の芸術や文化が「プロパガンダ」と軌を一にするわけではないこと、体制内部でも芸術の処遇をめぐる意見の対立があったことは本書で指摘済みだが、一連の芸術政策が、個々の芸術家や学者、批評家たち、あるいは個別の作品（造形作品や芸術論）にいかなる作用を及ぼしたかという問題には深く立ち入ることができなかった。戦中戦後の連続性（いわゆる「貫戦史観」）も含め、この点を緻密に検証しない限り、この時代の文化・芸術、もっといえば個と集団、芸術と社会の関係性を真に理解することはできないだろう。今回のこの研究は、まさしくこの根本的な問いを探求する試みであった。

３．研究の方法

本研究は、わたし単独での調査によるものである。調査を効率よく円滑に進めるための方法を構築する必要があった。そのために、クラウディア・サラリスによる唯一のクアドリエンナーレ論（Claudia Salaris, *Le Quadriennali*, 2004）を熟読し、考えうる 3 つの課題を前もって抽出し、それを研究テーマとした。とりわけ（A）と（B）は、アーカイブでの現地調査であり、関連する資料の発見と収集に多くの時間が費やされた。（C）は逆に、既存の批評集や研究書の読解を前提としたものであったが、現地調査により、よく知られた批評家や美術家以外にも、（今日的な言い方を用いるならば）「アート・ジャーナリスト」とも呼ぶべき書き手の存在を発見した（後で詳述）。

（A）実証研究：第 1 回からの第 7 回までのクアドリエンナーレの実態調査
各回の開催理念、受賞作および政府買い上げ作の特定、および形態的特徴の把握、および現在の収蔵先などをクアドリエンナーレ財団のアーカイブでの資料閲覧によって現地調査する。

（B）マネジメント研究：関連する組織編制とその変化、法制度、事業の調査
事務局長（オッポ、ベッロンツィなど）、実行・企画委員会、1939 年創立のクアドリエンナーレ公社と法改正の影響、ローマにおける他の文化事業との連動性などを主たる対象とし、公式カタログの閲覧によって現地調査する。

（C）言説研究：クアドリエンナーレに対する美術家・批評家たちのまなざし
戦後イタリアを代表する「芸術新前線」をはじめ、乱立した芸術家グループの活動と、ヴェネツィア、ミラノ、ローマでの定期美術展のかかわりを整理し、発言力のあった美術家や批評家（たとえばロンギやグットゥーゾ）がどのような立場を示したのか、言説分析によって明らかにする。

４．研究成果

○収集した資料について

3 年間の現地調査および財団のアーキビストたちの協力によって、特別な許可のもと、以下の資料をすべて写真撮影することができた。撮影枚数は 3000 点に及ぶ。

・第 1 回から第 7 回までの公式図録
・第 1 回から第 7 回に関する主たる時事報道記事（Rassegna stampa）
・クアドリエンナーレを論じた戦前の文献 3 点、およびアーキビストのアドバイスによる通達文 5 点

上記以外に、財団が過去に刊行について協賛した文献を 3 点（1935 年第 2 回展のモノグラフ、ブッリとイタリア抽象絵画論）を進呈いただいた。

○調査を通じて新たに発見した事実やテーマ

前述のように、3 つの研究テーマに沿うかたちで、四年間の資料読解を進めた。各テーマについて発見された事柄を以下に記載する。これら意外とも言える事実や特徴を突き止めたことにより、本研究は、日本各地で開催される地域アートや芸術祭にも通じる歴史的教訓を得た。それは第一に、定期美術展は単に国や地域単位の問題ではなく、国際市場の動向や芸術に対する認識など、広い射程をもって議論されるべきであること、第二に、先述した自己演出をはじめとする「作品および展示のレトリック」は、通時的にも共時的にも、より深く検討される問題を孕んでいること、である。

（A）実証研究について〔関連業績：雑誌論文⑥、学会発表③、図書①、公開資料①〕

クアドリエンナーレは国家的な美術イベントではあったものの、たとえば同時期に開催された「ファシスト革命展」（1932）のように、権力を誇示するようなプロパガンダとは全く違った展示空間であった。褒賞制度と買い上げというシステムによって、各地方の芸術的成果を支援する機会だったと言える。とはいえ、いかなる流派をも容認するその開かれた展示は、1935 年の第 2 回展を境として、修正を余儀なくされた。それを端的に物語るのが、抽象芸術作品の不展示・不参加である。しかしながらそれはあからさまな禁止ではなく、おそらくは周到な根回しなど、諸力の微妙な調整の結果であり、この点については今後も継続して調査を進める予定である。

（B）マネジメント研究について〔関連業績：雑誌論文⑥、学会発表③、図書②、公開資料①〕

特に、各回の展覧会規約の精読に焦点を合わせて研究を進めた。明らかになったのは、回を追うにつれて規約が細分化され、項目が多くなっていく、という事実である。それは 1952 年第 6 回展および 1956 年第 7 回展において顕著であった。
わたしたちは通常、ファシズムを規制や抑圧の時期と理解しがちであるが、クアドリエンナーレに関してはファシズム期に実施された 1～4 回の展覧会の規約の方が「自由度」があったとの解釈が可能になるだろう。逆に戦後のクアドリエンナーレはサイズや部門の設定など、厳しい制約を課す傾向にあった。
とはいえ、この事実は、単体で解釈するべきものではない。実態的には展覧会の背後にある時代の趨勢や美術の国際化といった、別の要因が連動していた可能性がきわめて高い。すなわちクアドリエンナーレの「通史」では見えにくい諸事実との照合が欠かせないことが、調査に

よって明るみになった。

（C）言説研究について〔関連業績：雑誌論文②・⑥、学会発表①・③、図書③〕

既存の批評集や研究書の読解を前提とした研究テーマであったが、現地調査により、よく知られた批評家や美術家以外にも、(今日的な言い方を用いるならば)「アート・ジャーナリスト」とも呼ぶべき書き手の存在を発見したことにより、研究方針を修正し、ヴェネツィアやミラノの定期美術展との比較というよりは、クアドリエンナーレという国内展と美術の国際動向に照準を合わせることにした。

たとえば、クアドリエンナーレの報道について、(ジュゼッペ・ペンサベーネやアナクレート・マルゴッティなど）今となってはその存在を忘れ去れたジャーナリストたちが、決して無視できない量の評論を書き残していた。しかも彼らは、この 4 年に一度の定期美術展に、それこそ定期的に論考を寄せた論客でもあり、各回の言説を相互に比較して読み解かねばならない。この作業の直接の成果はいまだ発表できていないが、2022 年 3 月に刊行予定の『あいだ／生成』に寄稿予定であることを付言しておく。

もう一つの重要な発見は、国内展であったクアドリエンナーレが、それでもやはり国際的な美術の動向と切り離して考えることができない、ということである。ただし注意すべきは、ここでいう国際化が、二重の意味を帯びていることである。第一のそれは美術行政に関わるもので、他国の美術館にイタリア美術の成果をいかにプロモートするかというアート・マーケットに深く関わる国際化である。もうひとつはこれまでほとんど見逃されてきた芸術家同士の国際的な連帯である。クアドリエンナーレについてその中核にいたのは間違いなくエンリコ・プランポリーニである。彼はまた 1945 年に「アート・クラブ」なる国際組織を設立し、美術館などの公的機関を介さず、いわば自前で美術の国際振興に貢献していたようだ。この点については基盤研究 C「アート・クラブ（1945-1964)の国際展開の抽象美術の組織論」(21K00241 代表：鯖江秀樹）にて、継続して調査に挑みたい。

○研究成果一覧

〔雑誌論文〕　（計　6 点）

①鯖江秀樹「動体写真という反証――ウンベルト・ボッチョーニ試論」、『ディアファネース（京都大学大学院人間・環境学研究科岡田温司研究室紀要)』、第 5 号、2018 年 3 月、25-44 頁。

②鯖江秀樹「近代運動のパリンプセスト――《トッレ・ヴェラスカ》とエルネスト・ロジャースの建築論」、『表象』、第 12 号、2018 年 4 月、118-134 頁。

③鯖江秀樹「生存のためのデザイン――横井庄一の家と衣」、『京都精華大学紀要』、第 53 号、2020 年 2 月、26-46 頁。

④鯖江秀樹「ある訳注への補遺――ウンベルト・ボッチョーニの彫刻とロベルト・ロンギのエクフラシス」、『ディアファネース（京都大学大学院人間・環境学研究科岡田温司研究室紀要)』、第 7 号、2020 年 3 月、133-143 頁。

⑤鯖江秀樹「自動販売機のエレジー（上）――オートメーションの技術史」、『京都精華大学紀要』、第 54 号、2021 年 2 月、107-114 頁。

⑥鯖江秀樹「ローマ・クアドリエンナーレ研究――展覧会規約の改変過程から」、『あいだ／生成（京都大学大学院人間・環境学研究科武田宙也研究室紀要)』、第 11 号、2021 年 3 月、1-13 頁。

〔学会発表〕　（計　4 点）

①　鯖江秀樹「潜像としての触覚――未来派から戦後デザインまで」、研究会「20 世紀イタリアの芸術と文化」（科学研究費若手研究(B)「国際的文脈における戦後イタリア美術と文化的葛藤――芸術・産業・メディア」（代表：池野絢子)、京都造形芸術大学外苑キャンパス、2018 年 3 月 18 日

②鯖江秀樹「20 世紀の風景と環境」、「都市とポピュラー文化」、横浜都市文化ラボ、2018 年 9 月 5 日

③鯖江秀樹「芸術の前線――ローマ・クアドリエンナーレの貫戦史」、表象文化論学会第 13 回研究発表会、山形大学、2018 年 11 月 10 日

④鯖江秀樹「生存のためのデザイン――横井庄一の衣、家、器」、京都精華大学デザイン学部公開講座「デザイン・レクチャーズ」、2018 年 12 月 28 日

〔図書〕　（計　5 点）

①鯖江秀樹「第 5 章　幻のなかの経験――ローマ万博の展示空間」、暮沢剛巳ほか『幻の万博』、青弓社、2018 年、152-183 頁。
②鯖江秀樹「ふたつの名をもつ国際展の定点観測――山下晃平『日本国際美術展と戦後美術史』書評」、『表象』、第 13 号、2019 年、176-178 頁。
③パオロ・ダンジェロ『風景の哲学　芸術・環境・共同体』鯖江秀樹訳、2020 年 2 月、水声社。
④鯖江秀樹「夕まずめの眺め――『断層図鑑』と『庭園都市』」、『ユリイカ１月臨時増刊号　総特集戸田ツトム 1951-2020』、2020 年 12 月、385-393 頁。
⑤鯖江秀樹「天才ナカノン――軽やかな遊びとしてのイラストレーション」、中野裕介／パラモデル『まちがｅる読み、ｉかれた挿し絵　中野裕介／パラモデル作品集 2010‐2020』、青幻舎、2021 年 2 月、210-225 頁。

〔公開資料〕（計　１点）
①「【資料１】第１回ローマ・クアドリエンナーレ展覧会規約」鯖江秀樹（訳）
https://researchmap.jp/sabhide7/%E8%B3%87%E6%96%99%E5%85%AC%E9%96%8B

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 鯖江秀樹	４．巻 7
２．論文標題 ある「訳注」への補遺――ウンベルト・ボッチョーニの彫刻とロベルト・ロンギのエクフラシス	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ディアファネース　芸術と思想（京都大学大学院人間・環境学研究科岡田温司研究室紀要	６．最初と最後の頁 133-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鯖江秀樹	４．巻 53
２．論文標題 生存のためのデザイン――横井庄一の家と衣	５．発行年 2020年
３．雑誌名 京都精華大学紀要	６．最初と最後の頁 26-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鯖江秀樹	４．巻 12
２．論文標題 「近代運動」のパリンプセスト――《トッレ・ヴェラスカ》とエルネスト・ロジャースの建築論	５．発行年 2018年
３．雑誌名 表象	６．最初と最後の頁 118-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鯖江秀樹	４．巻 7
２．論文標題 機能主義建築の臨界――後期モダニズムにおける人間的なもの	５．発行年 2017年
３．雑誌名 『あいだ／生成』	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鯖江秀樹	4．巻 5
2．論文標題 動体写真という反証――ウンベルト・ボッチョーニ試論	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ディアファネース（京都大学大学院人間・環境学研究科岡田温司研究室紀要）	6．最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鯖江秀樹	4．巻 54
2．論文標題 自動販売機のエレジー（上）ーーオートメーションの技術史	5．発行年 2021年
3．雑誌名 京都精華大学紀要	6．最初と最後の頁 107-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鯖江秀樹	4．巻 11
2．論文標題 ローマ・クアドリエンナーレ研究――展覧会規約の改変過程から	5．発行年 2021年
3．雑誌名 あいだ／生成（京都大学大学院人間・環境学研究科武田宙也研究室紀要）	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 鯖江秀樹
2．発表標題 芸術の前線――ローマ・クアドリエンナーレの貫戦史
3．学会等名 表象文化論学会、第13回研究発表集会、山形大学
4．発表年 2018年

１．発表者名 鯖江秀樹
２．発表標題 潜像としての触覚――未来派から戦後デザインまで
３．学会等名 研究会「20世紀イタリアの芸術と文化」（科学研究費若手研究(B)「国際的文脈における戦後イタリア美術と文化的葛藤――芸術・産業・メディア」（代表：池野絢子）、京都造形芸術大学外苑キャンパス
４．発表年 2018年

１．発表者名 鯖江秀樹
２．発表標題 20世紀の風景と環境
３．学会等名 「都市とポピュラー文化」、横浜都市文化ラボ
４．発表年 2018年

１．発表者名 鯖江秀樹
２．発表標題 生存のためのデザインーー横井庄一の衣、家、器
３．学会等名 京都精華大学デザイン学部公開講座「デザイン・レクチャーズ」
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 パオロ・ダンジェッロ、鯖江秀樹	４．発行年 2020年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 320
３．書名 風景の哲学	

１．著者名 暮沢 剛巳、江藤 光紀、鯖江 秀樹、寺本 敬子	４．発行年 2018年
２．出版社 青弓社	５．総ページ数 298
３．書名 幻の万博	

１．著者名 中野裕介／パラモデル、鯖江秀樹、宇野邦一	４．発行年 2021年
２．出版社 青幻舎	５．総ページ数 256
３．書名 『まちがeる読み、iかれた挿し絵　中野裕介／パラモデル作品集2010‐2020』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関